

今日の福音書は、私にとっては神学校の学生の時、説教演習で担当させられた箇所でした。ですから、とても印象深く、また、これは、神様の愛をよく伝えているたえ話だと思います。

有名な話ですが、改めて物語の背景と、あらすじを見て行くことにしましょう。

イスラエルは、果物が豊富にとれる国ですが、中でも、ぶどうは、代表的な果物で、ふたりの人が、豊かなぶどうを棒にかけて、運んでいる絵が、イスラエル観光局のシンボルになるほどです。ぶどうの収穫は秋の楽しい行事ですが、秋が深まって雨が降るようになると、ぶどうの皮が水分を吸って破れてしまうので、急いで取り入れなければなりません。

そこで、ぶどう園の主人は、猫の手も借りたいくらいの忙しさと、大勢の労働力を必要としますから、日雇いの労働者を収穫のために採用するのです。普段羊飼いをしている人々も多く雇われたと思います。

最初の人は夜明け頃に雇われたわけですから、朝6時ということになるでしょう。その時は、主人は、1デナリオンという、当時一日分の賃金として一般的だった値段で契約しました。ところが、朝雇った人たちだけではとても仕事が間に合わない、と判断して、9時から、12時から、そして3時からというふうに、次々と雇います。その時の主人の言葉は、「あなたたちもぶどう園に行きなさい。ふさわしい賃金を払ってやろう。」というものでした。

ところが、夕方の5時という、もうあと1時間しか時間がないのに、この主人は、それから人を雇います。ただし、この時は、「あなたたちもぶどう園に行きなさい。」と言いますが、いくら払ってやろう、というお金の話はしていません。

ここまでは、よくあるぶどう園の主人の、人を雇う話です。

ところが、この後で、このぶどう園の主人は変な行動をします。賃金の支払い方です。

私たちは、この主人のやり方に、素朴な、ふたつの疑問を抱きます。

一つは、もちろん、朝から働いた人にも、9時からの人、12時から、3時から、そしてたった1時間しか働かなかった5時からの人にも、同じ1デナリオンの賃金を払ったことです。このような気前のいい支払いをしていたら、普通の企業ですと、会社がつぶれてしまいます。どうして、同じお金を支払ったのか、というのが、最初の、そして最大の疑問です。

そして、二つ目の疑問は、どうして、支払う時、最後に来た者から支払い始めたのか。最初から働いた者が最後になったのか、という疑問です。同じ金額を払うにしても、長く働いた人に最初に渡すのが、一番問題が起こらない方法のように、思えます。朝から働いた人に、1デナリオンずつ払い、その人たちが帰ったあとで、9時からの人、12時からの人、とだんだん渡してゆけば、5時から働いた人に1デナリオン渡しても、その人たちが黙っていれば、問題は起きなかったと思うのです。

この疑問に、別のたとえで答えるとしたら、ある家庭で、5人兄弟がいて、学校からテストの成績を持って帰ってきた時の話を、あてはめることができるでしょう。

5人の兄弟が、上の方から順番に、お母さんにテストの点数を見せに来た、ということにしましょう。長男は、100点のテストを持って帰りました。「よくやったねえ。今日はごちそうを一緒に食べよう。」と言って褒めてやりました。

次男が次に入ってきます。何点でしょうか。75点ですね。「ああ、がんばったね。夕食まで遊んできなさい。」と言う。それから、3男が50点。4男が25点。そして、末の5男が10点のテストを持って帰って、お母さんに見せたとしましょう。下になるほど、情けない顔をしていることでしょうね。末の5男などは、泣きべそをかいているかもしれません。

それじゃ、その夜、お母さんは、どうしたでしょうか。

成績の良かった長男に一番大きな肉を渡し、下になるほど、小さくなっていったでしょうか。それとも、下の5男に最初に、上等のお肉を渡し、下から順番に、みんな同じ上等のお肉を渡して、「さあ一緒に楽しい夕食を食べましょう。私は、あなたたちがいい成績を取ろうと、悪い成績だろうと、あなたたちみんなを同じように愛していることを忘れないでね。」と言うでしょうか。

おそらく、どこの家でも、お母さんは、息子がみんな可愛いし、成績が悪くて泣きべそをかいている末の息子を最初に元気付けてやりたいと思うに決まっています。

ぶどう園の主人の気持ちも、それと同じではなかったか、と私は想像するのです。

朝から雇われた人は、一日働くのですから、体は一番疲れているでしょうが、仕事が終わる頃、彼は1デナリオンの賃金ももらえるので、喜んで働いているでしょう。ところが、午後から雇われた人、特に、5時から1時間しか働かなかった人は、体こそ疲れていないかもしれませんが、主人はいくらくれるのか、その賃金のことは、何も話してなくて、ただ「あなたもぶどう園へ行きなさい。」という言葉しか言われていません。今夜は家族に何も買って帰ってやれない、と情けない思いで働いているだろうと思います。

この人は、働きたくなかったのではありません。働きたくても、「だれも雇ってくれないのです。」と言っていました。朝、声をかけられたら、その人は喜んで働いたことでしょう。

やさしいぶどう園の主人は、誰よりも先に、この悲しい顔をして働いている、夕方1時間しか働けなかった人を、早く安心させてやりたかったに違いないと私は思うのです。

私たちは、「労働者と賃金の話」と聞けば、私たちの信仰による努力とそれに対する神様の報酬、というふうに考えて、たくさん努力した者には、たくさんの祝福が与えられる、と考えてしまいがちですが、それはどうも間違っているらしい。

このたとえ話では、賃金が出てくるけど、神様が私たちに下さるものは、人間の努力とは全く違う、母親が子どもを愛するように、子どもの出来不出来とは全く関係なく与えられる、恵みだということです。それは他のたとえで言えば、神様は『悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる』（マタイ 5：45）ということだと思います。

私たちは、それぞれ、神様から声をかけられて、クリスチャンになりました。子どもの頃から声をかけられた人もあるでしょうし、最近になってクリスチャンになった人もいます。その信仰生活はさまざまですが、お互いを競争相手にする必要はありません。

みんな同じ1デナリオンを頂けることを喜ばいいのではないのでしょうか。

そして、このぶどう園の主人のように、1デナリオンが人々に行き渡っているかどうか、心配しながら見回れる者でありたいと思います。